

藪内亮輔歌集

『心臓の風化』

(青磁社)

生に内包される死が濃く描かれている第二歌集。

冬雨は靴を濡らしき みづからの骨ほどの本抱へてゆ
けば

何気ない一瞬の風景の中にも生があり、その生はいつも
死を抱えているのだと繰り返し突きつけられるようだ。

肉体のなかにある夜をこぼさずにどこまで歩きつづけ
るのかな

鞆はたれも乗らずに揺れてみず風もふかずにこの世
もあらず

死の影とともに、強烈な虚無も漂う。暗さ、むなしさを
抱えてしまった肉体としての人間。この世とあの世の境で
たゆたっている肉体を思う。

第一歌集『海蛇と珊瑚』に続き、モチーフとして「花」
が頻繁に登場する。花は生の象徴もあり、死に向かつてい
る象徴でもある。

熱湯はたぎる透明な花である 妊婦を殺せばふたり殺
せる

造花すら花だ 雪すら花なのだ だとすれば咲かなか
つたあなたも

概念だけで終始していない。土地や風土や社会もうたう。
だがそれは時事としてだけではなく、普遍性を把握しよう
という作者の意志を感じる。

(斎藤美衣)

久永草太歌集

『命の部首』

(本阿弥書店)

高校生の頃から短歌を作りはじめ、牧水・短歌甲子園で
準優勝したこともある作者。獣医学部学生を経て、現在は
獣医師として動物病院に勤務しているという。第一歌集。

子となつて命となつたかもしれぬ摘出卵巣内のつぶつ
ぶ

治す牛は北に、解剖する牛は南に繋がれている中庭
獣医師は命を扱いつつも、救うことだけを目的とするの
ではない。自然界の摂理、人間の営みの中で、葛藤ととも
に自分を位置づける。口語体が簡潔に響く。

貝殻を匙にアサリの汁掬う弥生時代の親父もきつと
国ごとの愛の形よ三人乗りバイクにて子は父母にはさ
まれ

ちゅうちゅうたこかいなを十回唱えずに風呂から上が
る家もあるのか

作者の関心は、生きることから食べる・食べられること
に及ぶ。時代を超えた題材や宇宙空間、旅や外国文化など
をテーマとしていても、食べることで歌が繋がりが合う。ま

た、壮大だけでなく手の届く範囲のことで読者の心を掴
むところがよい。ユーモアをもつてさまざまな生き物の営

みへの好感を描く。さらに、生きているとは、親や子や家
族がいるということだ。家族のいる景色を詠んだ短歌に健

やかな生を感じた。

(中村 恵)